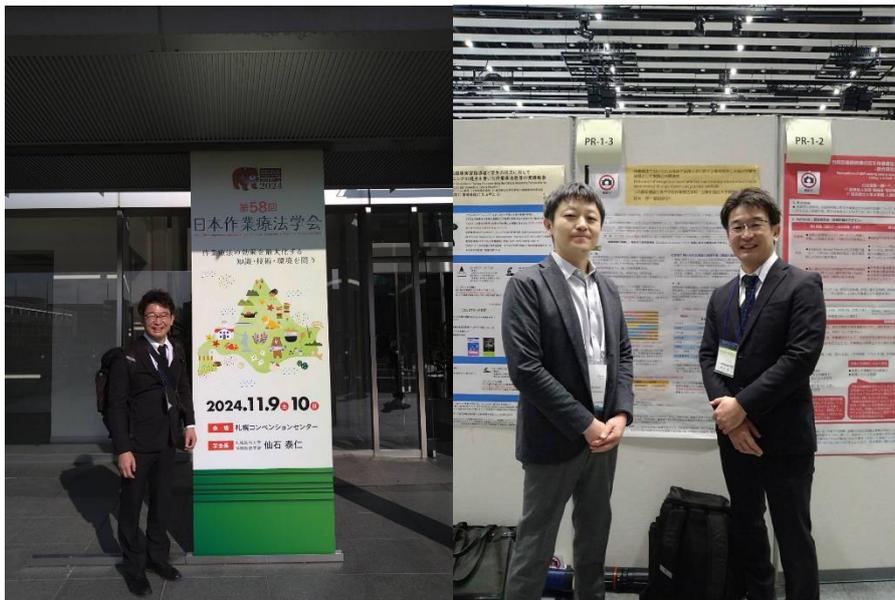


## 第58回日本作業療法学会

作業療法学科教員の鈴木渉です。第58回日本作業療法学会が11月9日から10日に札幌コンベンションセンターで開催され、発表を行いました。この日の札幌は、Snow Man Dome Tourやレバンガ北海道の試合などイベントが重なっており、全国からファンが集結し、飛行機やホテルの争奪戦まで起こるほどの大混雑でした。私は5月頃にホテルを抑えていたため影響を受けませんでした、とにかくすごい人でした。

発表演題は『作業療法で用いられる理論や実践手法に関する養成教育と卒後の作業を基盤とした実践との関連性』です。作業を基盤とした実践（以下、OBP）とは、対象者（患者さん）の大切な作業（活動）を実際に行うことによって評価し、介入（治療）する方法の総称で、わが国において脳卒中患者を対象としたランダム化比較研究によって、その効果が報告されている作業療法実践の一つです。今回はこのOBPを行うために養成校教育が重要であることを明らかにした研究成果を発表しました。多くの参加者から質問をいただき、有意義な時間を過ごすことができました。



鈴木 渉（本学作業療法学科教員） 左は共同演者である東北福祉大学  
藪脇健司教授

今学会は、第8回アジア太平洋作業療法学会と同日開催（※土曜日のみ）であったため、海外の作業療法士との交流を試みましたが、長い間英語を使用していなく、聞き取りはできるものの、言葉がうまく出てきませんでした。しかし、今の時代は便利なアプリがあるため、短い時間でしたが会話を交わすことができました。学会では、多くの演題や講演を聴講し、知見を広げることができましたので、今後の研究や教育に活かしていこうと思います。

また、北海道内の臨床実習でお世話になっている作業療法士の諸先生や、久しぶりに道外からの何人もの先生にお会いすることができました。さらに、多くの卒業生が演題発表を行っており、物怖じすることなく堂々と発表している姿を拝見し、とても誇らしい気持ちになりました。私もまた頑張らなければいけないと身の引き締まる思いでした。